

転移性肺腫瘍手術症例の検討

濱田 利徳 岩崎 昭憲 江夏総太郎
巻幡 聰 平塚 昌文 吉永 康熙
山本 聡 白石 武史 白日 高歩

福岡大学医学部呼吸器・乳腺・内分泌外科

要旨：転移性肺腫瘍に対する手術は原発巣の良好なコントロールやそれに伴う予後の向上によりその頻度は増加している。一般的な術式として、部分切除が多く取り入れられている。しかし原発性肺癌の基本術式である肺葉切除や区域切除が選択されることもある。今回これらの手術術式を選択した転移性肺腫瘍を検討しその成績を明らかにした。1994年1月～2005年12月までの12年間に行われた152例の転移性肺腫瘍のうち、区域切除以上の症例43例（28.3%）を対象とした。肺葉切除群（n=24）と区域切除群（n=19）の2群に分類し生存率や合併症を解析した。術後合併症は肺葉切除術群に気管支断端瘻が1例、区域切除群で胸腔内血腫が1例に認められたが、手術関連死亡例は認めなかった。胸腔鏡を用いた切除は11例で、全体の25.6%に行われていた。3年、5年の生存率はそれぞれ62.0%、35.3%であり、各術式別では、3生率、5生率は肺葉切除術で68.8%、50%、区域切除術で53.8%、14.2%であった。両群間の生存期間に統計学的有意差は認めなかった。転移性肺腫瘍に対し、肺葉切除術や区域切除術も有用な手術術式と考えられた。

キーワード：転移性肺腫瘍，肺葉切除術，区域切除術